



特
6

二
すること、このくらいよいことでもみなわるうみへます
そふいたしますとよの中に、おがみはとゑらいものは
ないようにありますから、ちゑふんべつ、のよい人とあ
ることが、できず、よき人とありまして、神様のあたすけを
うける、ことが、でき、ませんから、おを折ることを、つと
めて、なんでも、自分、あかんもの、自分、ぶちようはふもの
と、おもふ、て、ゐます、と、さには、神様も、おん、あはれみ、下さ
れ、人にも、すかれます、おを、あること、は、まことに、人々の
こゝろ、お、て、お、かねば、あらぬ、ことを、ござり、ます、けれど、も
人には、おれが、と、いふ、な、さけ、あい、心が、ござります、から
どうも、おを、ある、ことが、むつかしい、のです、しかし、むつか
しい、と、いふ、て、い、ましたら、おに、おも、むつかしい、のです、こ
の、むつかしい、のを、おもひ、きつて、やりましたら、はじめ、むつか

三
がつて、ゐました、よふ、には、むつかしい、ことは、ない、もの
です、世の、たど、へ、よ、『おん、じる、より、生む、が、やすし』と、いふ、のは、
この、こと、です、むつかしい、ことを、おもひ、きつて、しました
ら、神明の、おん、たすけ、が、いつ、と、なく、みの、ま、り、に、下つて
ま、り、まして、おもひ、のは、かの、し、お、せ、を、うける、もので
す、ま、ことに、い、ふ、も、な、げ、か、は、しい、こと、です、が、嫁と、し、う、と
め、この、中、の、お、る、い、の、は、ま、ことに、こ、まつた、こと、です
ナン、デ、モ、は、じめ、は、好、い、よ、め、を、もら、ふ、て、と、おもひ、二、里、も
三、里、も、足、ふ、み、だ、して、さ、さ、あ、せ、たり、と、ひ、あ、は、せ、たり、いろ
く、と、入、費、を、か、け、よ、め、を、もら、ふ、て、おん、し、んの、む、ね
な、せ、お、ろ、し、わ、し、は、だ、ん、く、と、る、と、し、で、な、に、も、か、も、せ、且、よ
なら、ね、ば、なら、ぬ、と、い、ひ、おん、でも、よ、め、を、お、が、家、に、お、つ
か、さ、う、と、おも、ふ、て、お、る、あ、い、だ、の、よ、ろ、しい、が、一、日、たち、二

日たちする内に おれがどいふが 出てきまして あ、
では あい とうでい ない と わるい ことばかり めに つい
て 初は なんでも ど おもふて もらうた よめが ついに
いなしたく なつて きます 又 よめ女も その 通りで はじめ
の あいだは 不調法者で ござります から 行届かぬ こと
な かつて おつかい 下されまし と いふ て しうとめ し
氣よ入る ように ど おもふ 氣が はあれませぬ から なに
と を いたし ましても へいへい へいへい と すなを に 去て
おります けれども 一月たち 二月たち いたします と モウば
ちく と おれが 出て まゐりまして 見へまして 棚の角
へ はり上げ しうとめ の 見る ことばかり 見へまして 向い
の いんさよさん や おばいさま の ようでさた おかたじや
い つも おもしろい こと いふて アハ、アハ、と わらはして

ござる のに うちの ばい様 は 何時も にかひ かはして
いじのわるい ことばかり いふて ござる チト ひかひ のま
ねを すれば よい とか あんとか おもふ ように あります
さうなりますれ ば 不調法者の 嫁女が 一二ヶ月の 中に ゑらい
利口おもの よ あり とるとして 手足の よいし しょうとめさん
は なかく 達者な ばいさま に なります から 家内は い
つも もさく と して まゐります これと いふも おれが ど
いふ が がつさあふ から です よめか しうとめ の 中
ど ちら か 一人 だけ 我を をりましたら 家内は にくく
ど 中よく くらせる に ちがいない の です あるところ に
まけず おとらず が を ぶりまはして ゐます よめ と しうと
め が ござりまして よめ女 の 月の中 よ 一度は せひ さと
へ にげてゆく 姑も 一二度の 娘を やつた 先へ よめの 小言

をいひにゆくといふまことに中々見るいあいだ
でござりましたがだんくにと中のあるさがこうじまし
てよめ女はいまくしいてならぬものですから心安
い 醫者の内へまゐりましてたのみますには先生まこと
に申にくいこととござりますが私方の姑はござんじの
とをり口やかましいるじのあるいばいさまでござり
ますよつてになんでもよくかなんぞよいおくすりを御
加減なさつて下さりませぬかと申ました醫者どのはどうお
もひましたかさつそく承知いたしました申すにそれは
おやすいことと申すはしかし一時によくがまわりまし
ては人がへんよおもひますするとなんどかかとかい
ろく申ましてついにあなたのお身の上ですからちと
さながらおもふてくすりのよくがじりくと五体に

えみわたるようにいたえますとのぼせるとかめがらすむ
どかおなかがつつばるとかまいにちくわるうなりま
してついにはいのちをとるといふような加減にいた
しませうかと申ましたらよめ女の申すに一時に
ころしてもしろけんいたしましてはせつかく骨あつたか
ひがござりませんからあるだけヨリくとよくのま
るよふなおかげんにしていたいたうござりますと申
また 醫者はさつそく承知いたしましたしていろくくすりを
調合してやりましたよめ女はこのおくすりは何日位で
き、めが見へますかとたづねましたら凡そ百日もた
ちましたらき、めが見へまゐやうあかし平日すきなものを
せいにつくあいしいものをたべますと七十日あまりで
効があらはれますなるだけ姑御のきげんをそこねたり

おこらしたりしてはくすりをのますことがむつかしい
ですから必ずおこらしなさるゝわづか七十日雨まりです
さげんをそこねなさるナとおしへておしいいさみよ
ろこんでかへりました實におそろしいよめ女ですこれ
やはりおれがどいふ我がはびこるからですよめ女
は内へかへりましていろくくとくすりをのます工夫を
いたしましたがおアさげんをとつていろくと姑の
よろこぶようおことをいたしましてうまくだましてと
うぐくすりをのませましたうまいものをたべさすと
くすりがはやくさくそうおば様はなにがすさじ
やかがすさじやと姑のすさなものをたべさしました
一度や二度でまいにちのことですから姑はちかごろ
よめ女のしむけがちがひますからまことよよろこびま

しておまへたちがまづいものをたべているのにおたし
だけうまいものをたべてゐてはまことにすまんおまへ
たちどおなじものをたべさして下されなにもおいしもの
をたべたくはあいと申ましたよめ女の心のたくみを
をおしつゝみ口ばかりやさしく申すにおとしよりの今
までいろいろと苦勞をなさつたよつてにこのよう
おくらしむでさるといふものあなたお一人おあがり
なさる位にされてありますなにもわたしらにおかまい
下さるなといふのはやくくすりがさいてほしいから
とたい口先ばかりうまく申てゐますが姑はよめ女の
しんせつにせしんせつを眞にうけてそのよろこびなりに
たとへん方もあいよめ女をかあいがり人にはなし
たしますとさよめ女のこをほめてそのしんせつ

に なかぬばかりに よろこんで をります くらい ですから
よめ女を いたはり ますこと ひど通りで ござりません きんじ
この人 は みな あの 中のわるかた 二女の中 が あせ あの
よふに よく なつた か と かんしん いたしますくらい です
姑を ころそう と おもつて いたしました しんせつぶりも 姑に
は 真にうけて えんじつ しんそこ から よろこび まして よめ
女を かあいがり ました が よめ女も いつのまに やらが
が おれて きました さうすると 本然の善心が あたまを
げて きました 心の中に はびこつて あつた あくまが ふるう
て きました ア、こんな 善い 姑御を なせ又 ころさうあぞ
と おもふた やら と いふ さ に なつて きました から カ
ノ くすりを 飲ませた のが 苦になつて たまりません えかし
もう 六十日 はと 過た 先生の はなし の とをり に 七十

日あまりで さゝめが みへると してみると もう 五づかの
日より ない アア ぬらい ことを したと おもへば 立
ても坐ても ゐられず かの 醫者の内へ 参りまして 涙と とも
に 心得ちがいを 後悔して どうぞ 先生 あの くすりの せく
を けす 敵薬 は ござりませんか ぬらいことを いたしまし
たと 申ました 醫者は よめ女の しんじつ 後悔した よふす
を みすまして 申すには であんしん なさいませ あの く
すり は 強壯劑と 申して からだを たつしや に する くす
り で けつして せくになる ので ござりませぬ 初め
あなたの 御様子 を 見ますのに ためても あかしく おやめな
さる ようす が あいと 思ひ ました ゆゑ まことに すまぬ
こと で ござります けれど あなた を だまし ました の
です マア、御二人 とも 申よく ありあさつた のは なに

より けつこう ですと 申ました から よめ女 は サテハ さ
うでしたか と あんしん の 胸あせおろし ました この 醫者ど
の なかく 心得た 人で この よふ に 二人の中 の よ
く なつた のも 一通りの 見けで は ござりませぬ よめ女 が
にくい と おもふて ある 姑に やさしく して うまい物 を
食せました のに 中々 一通の しんぼう で ござりません が
それを しんぼうして いたし ました 事が 悪です と いたし
かた が ござりません けれども 善です から 善に可むかう刃な
しで 姑も いつと なく おれが と いふ 我が おれてしま
いまして 今まで にくい と おもふて ゐた よめ を かあいが
る ようよ なりました また よめ女 の しんせつ を うれしい
と おもひます のに よめ の にせしんせつ を 信じて うた
がひ ませぬから で もし 姑が うたがひ ましたら このように

中よく なります 善が ござりませぬ ついにしんじつ ぞく
のため ころされ た かも しれませんが 又 よめ女 も
なじこと で 醫者の いふ ことを うたがは なんだ ゆへ 中
よく なつた ので もし 醫者の言葉 を 信じ ませあんだら
んあ あく人 に あり ぞんな ひどいめに あふて ゐる かも
しれませぬ かような あんばい に いつはりの せん を も
つて 眞實の愛 を おこし この 眞實の愛 が いつはりの善を
かへて 眞實の善と なし 眞實の愛と 眞實の善とが たがい
が を おつて 圓滿優美の間柄 と なつたのです これらが すな
はち 神の全智を見るべき ところ です コレにしても うたがひ
ど いふ ころを もちまして 神様の存在 を うたがひ なら
いたします は まことに つみ ぶかい ことで うたがふばつか
しに 大きな さいなんに あふ かも しれませんが 御互に 信者

たるものは しんするもの うたがはぬものと みづから なづけて
いますから 決して うたがう ては なりませぬまい 人は 方
便どか あんとか 申して いつはりを 申ますが 神様は けつし
て いつはりませぬ から うたがう ことは 甚だ 失禮で ござ
りませう

(柔和の徳) 齒の亡び舌は存す

齒と 申すものは まことに かたいもので 血氣さかんな
方の 大ていの かたいもので も かみくだく と いふくらひ
の もので ござりますが だんく と 老年に あります と
この かたい齒が よより まして 一ツ ぬけ ニツぬけ 三ツぬ
け して 一本も ないよう になります また 舌と 申すもの
は よほど やりらかるもので ぐにやく と して ござりますが
老年に なりまして も 舌は よわる と いふこと の ござり

ませぬ 『ドウデス 御いんきよさま あなた の いつも おたつしや
あ こと で かんしん いたして をりますが モウ 御いくつ
です 『ハイモウ 七十 になりました 『サヨウデスカ 中々 おたつ
しや あ ことです 『イヤモウ かない ませぬ としは よりともな
い ものです とうも 年をとり ます と ふじゆう で なりませ
ぬ めが かすむやら こしがいたむやら 耳が どをく あります
やら しかた が ござりませぬ とうも 齒がぬけます と なに
を たべ ましても 口の中で ナ子く と いはして 鵜飲み い
たしますので あぢが ござりませぬ と 申します が 『どまを と
ります と 舌が よわつて かないませぬ など とは だれも 申
しませぬ とうも ふしぎ あ は あの かたい 齒が ぼろく
ど かけたり ぬけたり して ぐにやく と やはらかる 舌が
いつまで も たつしや で しつかり して ある と 申すの

は ござういふ わけ で ござりませう よのなかに かたい と申
 ますもの は かへつて かたいのを のうて やはらかな もの
 が かへつて つよい のです たとへ に いふ とをり 柳に雪
 をれあし で あまり ぶつくと かたいものは かへつて も
 ぎをれ が いたします 雪の ふる とき よしなやか な やま
 ぎにの 雪も 多く つもりません が かたいぢに しやくばつ
 て ある 竹なご は 雪の爲に 折られます それも 同じことで
 あまり かたいぢあゝもの は てきを 多く うけます から た
 まりませぬ が やむらか あものは おさへ られても おされ
 ても ふはりく と いたします から かへつて おれたり めげ
 たり は いたし ません 人が けが に 足を ふみました とさ
 しんばうして おります のは 舌の ように やわらかな ので
 ござりまして いたい には ちがひ ござりませぬ けれどもし

マ 足を ふまれた いたさ だけ で すみ ます が これが 齒
 のよう に つよく なつて ナセ 足を ふんだ 何の 意恨がある
 のぢや と おこりだす と あいて に よりまして は けがに
 した ことを 態と えたように いふ とて 大に はらをたて
 る そう なります と 両方 あがら 齒のように かたく なりま
 すに ちがいない そういたし ましたら この しまいは ござあ
 り ましやう 双方 たちあがりまして 手を ふり まじし まして
 大立まわり と なりましやう さすれば 双方 とも ぶつたり
 ぶたれたり して ひどい目 を せまや なりませぬ この いた
 いめ に あふ のは あせか と まをせば 齒の ように かた
 く なり ました から で しやう 誰方も 御ぞんじ の 太閤様
 の 逆臣 明智光秀 を うちとり 主人 の 仇をうち ました
 のち 江州 安土の 城で 織田家 後目の 評定 が ござりまし

た そのとき 織田家第一の 大將 武勇無双 と いはれた 柴田勝家が 太閤様の 手柄の 大きいのを ねたましい おもひ まして なんでも 太閤様と けんくわを しかけて 太閤様を うちころそう と いたし ました ことひ いかゞで ござりませう 諸大名が 居ならんで ある 大廣間 大ざしきの まん中 で 太閤様の 下賤で あつた ときのこと を いひま して 猿面冠者 とか 藤吉とか はての わんまを せよと ま で 申ました が 太閤様も そのときは もはや 羽柴筑前守 です 立派な 大名で ござります から この くらいに いの れて うれしい こと は ござりません が さすがに 天下を 太平に しづめ られた お方です から 齒又は おありなされま せん やわらか な 舌よおあり ござれ まして 柳に かせと うけながし はらたてる ところか にこやかな かは をして

むかし の いやまゐり下郎の 藤吉が あなたがた と 御一坐 いた します やうに なつた のも 先君の御恩は 申までも なく 柴田殿 はじめ 御一坐の 方々の 御かげ です と へりくだり かへつて 禮を申され ました 又 はうばいの 柴田を あんま して 上手したか と いはれ ては 先君 御寵愛 殊よ 當家隨一 の 御家老 ゆへ 柴田殿の身とは 思ひぬ 先君の 御かたみ 先君 同様 に おもふ と まをされ いかにおこらさう と いた しまして も 腹をおたて ござりませぬ その とき 一坐の大名 方は 皆々 太閤様の 御かんよんの つよいのにかんしん いたしました けれども 柴田の つよい ぶつゝ したのを は めたものは ござりませぬ いかゞで ござりませう 織田家で 武勇に かけての たぐひ ござり 柴田 佐久間 は はろびま した のの つよいが つよいに あらぬ 善き 証據で ござり

ましやう せんから 又 舌の ように ぐにやぐと いたして
 むるのの 世に いふ いなばら を よい か と 申すに そ
 れは いけませぬ 舌の いかにも ぐにやぐと して ござり
 ます けれども まんなか に すつ と をつて ある しんが
 ござります から いかめられて も おさへられて も また もと
 の とをり ちゃんど あつて あります これです から ひさしく
 たもつ ので ありまして いがめられて それなりに ゆがみ
 おさへられて それなりに へこみ まして はいけ ません
 よの中 に いろく の 御仁が ござります から 神しんじん
 してゐる もの を とやかう と ひさ いたします が これを
 さいて はらを たてる の は むるい か よい か 子ト 御
 かんがへ なさりましたら おわかり なさりましよう すべて 宗教
 を 創め説き出す 御方々 は てきの ため イヤ てき の ぞ

ざりませぬ 他人の ために いろく と じやま いられました
 けれども 決して 齒の ように かく なりません 舌の よう
 に やわらか で 舌の ように 心が 通つて あります から じや
 まする人 に 一時は いがめられます けれども 一すじ 又 通つ
 た 心 六ヶしく 申せば 主義 が あります から ちゃんど
 もと の 通りよ なつて あります 又 じやまする から ど い
 ふて にくむ ところ か かへつて いろいろ ぶうり を とさ
 なんでも よき人 に してやりたい と の 心が ござります 吾
 教祖が いろく と てきの ため に くるしめられ ちまつた
 (イヤ 肉体と いふて 目に見へる からだ を くるしめられ なさ
 りました 心は 決して くるしめられ て は ござらぬ) けれども
 日々 に さかん に なります のは 齒とあられた と お考へ
 なさりますか 舌 に なられた と おかんがへ なさりますか

あれを 思ひ これをおもひ みますれば あまり ぶつくと
いたします ものは つよそうで つよく あい です から ぶあ
ため ねがはく は 舌どおなり なさるよう に ねがひ たい も
ので ぶざります ぶさ に より まして は 齒の ように た
とひ ぐだけ ても かけ ても 齒の ように ならねば ならぬ
こと も ぶざります けれども それは のちに べんし ませう

(人の善悪)

みどりなる一つ草とぞ春は見し

秋はいろくの花にぞありける

ささらぎ の ゆさ も いっしか に とけそめて ソヨくと ぶ
さわたる 春風に 今まで は しもがれた 去年の ふる葉に う
すぎたなく なつて ありました 野も 春のめぐみに うるをい
一芽 ふた芽 と 芽を ふき出しまして ぶこの 野邊も 青々と
青いけつと を まさつめた ように うつくしく 人の心も なにと

あう のどか で ぶれも これも みな うつくしい 青草じや と
おもふて めました のに 月日 が だんくと たつて 夏に
あり 秋になり ますと はぎじやとか さけふじやとか さくじや
とか いろくの花が ささまして はじめに みる 同じ 青
い色の 草じや と 思ふて めた くさが よい花 とか 見るい
花 とか いろく さまぐ の 花に わかれます こと は み
なさま の よく御ぞんじ なさることで ぶざりませう これと 同
じ ことで 人が ひじめて うまれたとき には 西も東も しりま
せなんだ 泣くより 外の ことは しりません いかある大家 の
子でも 又 いかなる びんぼうにんの 子でも おあじ ことです
可愛らまい みどり兒で ぶざります 即ち みどりある 一つ草
とぞ 春は見し です が 一年たち 二年たち 三年五年 十年 と
月日の 立てば たつほど いろくと ちがいが できさて

きます 或は ぬちのぬるい おこあいの 正しからぬ人 と あり
 或は 國のため 世のため に はねをつて なんぎを すくふ善人
 とも あります 楠公 のような 大人となり 足利尊氏の ような
 不忠な人 とも あります 即 秋はいろくの 花にぞありける で
 は ござりません か あせこのよう に いろく と ちがひます
 か ど まをします に すなはち 人の わたくし と いふ 心
 から 出る のです 或るところ に 寅造といふ人 が ありました
 この人の まことに 村のうけ も よい 正直な あさけふかい人
 で ござりました が いかる わけか 其家が まことに まづ
 しくて わづかに その日をおくつて 居りました 又 この寅造の
 兄で 福藏と いふ 人が ござりました この 福造は 田畑山林を
 ぶ たくさん に もつて よほどの 富豪です ところが チト 慾
 が ふかい から あんまり 村のうけの よろしい ござりません

であつた 或年のこと に 大早で 何るかも ござりません それに つ
 いて は どかく 人氣 も ぬるく 何の商賣も ふけいさです たゞ
 さへ 暮しかねて いる 寅造は まことに こまりまして 憂にし
 づん で をりました しかし いくら ふ景氣でも たべすに すこ
 すこと の ござりません から ありせん ものを うりしろ えて
 其日の けむりを はそぼそ たて、 ゐました が 坐して食へば
 山もむなし といふ 語の とをり 今は はや 必止と つまりま
 した 寅造の女房 が 寅造に むかひ 申すに これでは かない
 ませぬ から 兄さまの ところ へ なさつて ちどの めぐみ
 を 頼うと 申されたか 寅造は さ、ません けれど 女房の こ
 のよう に して 商賣もできず 米は貴く なつて 来ての ぢつと
 死を まつより外 いたしかた が ござりませぬ ゆへ 無益とは
 知りながら も たのんで 見たなら いか に 兄様じや と いふ

てる やはり 人じや どの マサカ いや とは 仰しやるマイと
 申ました から 寅造も 女房の心まかせ に いたしました 女房
 は子供を つかひに やりました が しばらくして、子供は かへつ
 て 申ますに いろく と たのみ ましたら 伯父さま は 下さ
 るやうな くちぶりで ソウか それは こまるで あらふと い
 ふて おばさまの かは を 見やしやつたら 伯母さまが 『あんげ兄
 弟でも モウ別家したら めんく 勝手に なんぎ すれば よい そ
 んふこと 人の知ったことかい』と いはしやり ました と 幼心に
 も むねんに おもひましたか ハラハラバラと なみだ を こぼし
 て をりました 女房は このことば を きいて 腹はたちます も
 の、致方が ござりません 夫のかは を 見ましたが 寅造は は
 じめに いのぬことカイと つぶやいて をりました が それあり
 ますまぬ こと です から そこらに あるものを よせ あつ

めて すこしばかりの 米とかへて その日の 食事を すましました
 どうぞ ござりませう 他人の なんぎして ある人に さへ 義捐
 金とか 寄附金とか 申して 身分相應に めぐみを かける人が あ
 ります のに じぶんの弟に かにも やらぬ とは どういふ こ
 ろ がけで ござりませう ねがわく ば 迄なため こんを心に ち
 らぬ ように 御心がけが かんじんです おやの財産を 相續いたし
 ます のハ 相續人ひとり うまい こと せよと いふて わたされ
 たのでも もらふたのでも ありません それを そうとは おもひま
 せん から 兄弟でも わかれたら 他人じや とか 相當に 身代を
 わけて やつたのに それを つぶしたのは つぶしたものが わる
 い とか 理くつ を 申す御方が ござりますが 父子兄弟のあいだ
 からは 理くつ では いけません 情といふ ものが なければ
 ありませぬ りくつから 申せば 不孝な子は にくい はづ です

けれども 不孝な子はなをかあいと いふ ことわざの ところ
 情といふものが あつて かあいがらせる のです ころうじませ
 世間の事は 情のもちわい です 理くつ ばかりで ありましたら
 この世は まことは 淡泊なものです サテ 又 その夜 福造の内
 へ 強盗が 五六人 をどり込まして 福造の目ささへ 刀を つきつ
 けて 金を出せと 申ました 自分の弟にさへ 物をやらぬ 福造が
 ころして 金をだしませう できることなら 金もやらず さられる
 しともあい です 福造の女房は さげびまして 近所の人を よびま
 した かし うけのようない 福造です 誰一人 ゆくものが ござ
 りません 強盗供は 家内が やかましく いひますから おどすため
 に 福造や 女房を チツチ と つきました 隣の寅造は 今嫂の
 よびごゑ を さ、まして 一時に はねをさ ままた が 嫂のこゑ
 で 寅さん 寅さん と いふ こゑが さこへます から 寅造の

一刻も 猶豫せず ゆこう と いたします と 女房は ためて
 大声で 『あんば兄弟でも 別家したら めんく かつて に なんぎ
 すればよい そんなことは ひどの 知ったことカイ』と いひました
 が 寅造は 女房を しっかりつけ て 大声よ ころばう は ところ
 だと いひながら 兄の内へ ゆきました この寅造は きんじよ
 さつて の つわもの ですから 盗人も これよ おそれて よげま
 した 福造は おかげで なにも さらせあんだ あくる日 福造
 は 寅造の しんせつを よろこび 又 その あんじふな を おも
 ふて なにはお かの 金と米を やらうと いたしました が 福造
 のよめ は これを 見て 申すに あたも よい弟さん を も
 つてござる から よろしい あのくらしい よんだのに マサカ さこ
 へぬことも あるまい に せんと 呼ばして おいて さられたり
 つかれたり したあとで 来て 一廉はたらいた ように 見せて へ

、しんせつをよい弟さんですナアと いやみを申ましたから
 福造も やること を やめにしました 寅造の六房は いかよき
 づよい 兄でも 命によめでも まさかに しらぬかは してゐる
 まい 命にか 禮を くれるであらふと おもふて ぬましたが あん
 のさたも ござりません から 見舞かねて むしんよ ゆきました
 福造も しらぬかはして ぬられませんかから 白米二升やりました そ
 ののち 寅造は あんじふのため よいへやしきを うりはらひ
 京へ ひつこしました が また前の 強盗が 福藏の内へ はり
 まして 思のま、ぬすみとつて ゆきました しふい福造ですから
 くにやみ ました が しかた が ござりません そののち 又盗人
 が しのびいりまして 火をつけて おいたのを しらすに ねこん
 で しまいました から 家もくらも すつかり やかれて しまいま
 した いままで とみさかへて ぬた 福造の家も まだいに かつて

あしく ありました 積不善の家には餘殃ありで ぬるいこと が
 つゞきます ついに 福造のやまひにか、り ました だんく 病の
 おもくなりすす ソシテ はじめから よい いしやに か、れば よ
 ろしいが こういふ人の くせと して それは いたしませんから
 やまいも ながひさ ます 又 だんく おもく なります サスガ
 ござせふ がまんを 福造も 今は 前非を くらみました しかし
 モウ 無益です 福造の くやしい さんねんをと いひながら 死
 にました それにひさ かへ 寅造の 一時 ひんきうで くるしみま
 したが だんく と しあわせよく 福造の 死にました とさまは
 相應の しんしょう に ありました 福造の 女房の 夫に いか
 れ まづしい くらし して 一人の子を か、へて かあしい月日を
 おくつて ぬました けれど だれひとり せわするものも あり
 ません が 福造の死後 しばらくして 目を ぬづらひ いろく

と 手をつくしましたが そのかひもなく 目をうしあい ました
 久しく京に をりました 寅造は ちにも しらすに 久々で 故郷へ
 かへりまして あまよめ の ありさまを 見て かなしみ わがつ
 まや子に かくして 米やせに を やりました が ついに ちによ
 めと 姪とを わがいへ に 引とつて せは を して 兄の子も
 わが子も おおじように かあいがり のちに 身しようを さへ わ
 けてやり 福造の やしきあどへ 家もたて、やり よめを もらふ
 てやりまして めくら のは、 を やしなひし うちすて、 あつ
 た 福造の はかめ あんばいよく してやりまえた そうな ちやも
 かんしん に よくできた は 寅造さんです 同じ兄弟でも この
 くらい に ちがひます この 二人も はじめ 生れたときにも
 つみのない やさしい笑顔を して ゐましたに ちがひない の です
 即ち みどりあす 一つぐさ です が よくの ために このくらい

ちがふた ものに あります 即ち秋いろくの花と なつたのです
 又 この 二人の 女房たちの 心は おなじような こゝろいさ です
 けれども 夫の心の よしあしで せんども あくども なりますか
 ら 子を そだてるにも 人に まじはる にも 寅造の こゝろいさ
 に なつて ほしいもの です この二人の しあはせ ふしあはせ
 に ついて 御かんがへ なさりましたら 御がてんの まゐる こ
 ども たくさん ござりませう

(良心の教) 難きをなせ神は汝を助けたまはん

すべて 人への 良心 といふ けつこうを心 が ござります この
 良心は からだと ともに 神より あたへ られて ござりまして
 なか／＼ かたぐるまい りちぎな 心です から ちつどの じるい
 こと ども ゆるして おさませんビシ／＼と せめまして すこ
 しの しんしやく は ござりません しかし かあしい こと には

人に 人慾の私と いふ あさけない あくまが ござりまして 楠
 公の 千早城を 北條の大軍が せめるように いつも いろくど
 良心を せめます 良心は いつも 慾といふ あくまと た、かい
 ます ソシテ 善人といはれ 義士と いはれ 烈婦 貞女 と いは
 れる人 は 楠公が 北條の大軍 を うちまかした やうに 良心が
 あくまに かつた人です もし 良心が あくまに まかされたら
 悪人と いふ名の つく 人とあります 悪人！ 悪人！ 悪人！
 人と善人 と 区かれる のは 良心と あくまとの ちまけよ
 ります ぶなたでも 悪人と いふ名 を 好く人は せけんに ある
 まいと ぞんじます 悪人となる のが さらいで ありながら な
 せ又 悪人と なる人が せけんに 多く ござりますかと 申ます
 に 人慾と いふ あくま は 人を まよ として いろくど
 ことを さします ソシテ この あくま の いふ どうりに す

るのは まことに らくなこと ですから 人はうつかり と あくま
 の いふことを き、ます この時 良心の 一生けんめい に あ
 くまの いふことを うちけそうと いたしますが 人はみあ
 らくあ ことを すきますから 良心の いふことを き、ません
 これを よく わかるように 申ますれば 放蕩な息子が ありまして
 金錢を ゆみづのようにつかひます と その 親達の むすこさ
 んの ためを おもつて いろくど めけん を めたしますで
 ござりましょう 又 茶屋の 人々や さけのみどもだち の ひど
 くと は いろくど うまいとつり を つけて ナニ ああたの 御
 内で 百や 二百の金を おつかいなさつても どうのこうの どい
 ふでい なし わかいたときには だれも あることとす やかましい
 いふ人は せけんしらす です 交際といふことと も あにも しらぬ
 人の いふこととすもの 氣にかけなざるナ と いひましたら こ

のむすことこの 耳みみにの どちらが つごうよく さこへませうか
 おやのあけん は 良心りやうしんのをしへ です 茶屋ちや人の いふことこの あく
 まの おしへ です コンナ ものです から 悪人あくにんといふ名 の さ
 らいで ありあがら 悪人あくにんになる人が おほくあるのです 良心りやうしんの い
 ふこと を むつかしがって あくまのいふこと を さくからせず
 良心りやうしんは ときによつて あくまに まけます けれども この道みち 良心りやうしん
 のいふ とうりに せにや 良心りやうしんは 小言こごをいひます よの常言じょうごんよ 心こころ
 の鬼おにが 身をせめる とは これです 心こころのおに ではないのです
 神かみから さづかつたる 神かみの心こころが あくまを せめるのです 人をた、
 いた よる ねられぬ のは 良心りやうしんが あくまのいふ とうりに した
 わがみ を せめしかるのです 人が みな 良心りやうしんの いふこと に
 したがひましたら けんくわ いさかいの あらう はづ が ござ
 りません が まへよも 申まをました とうり あくまの いふこと の

ちよつと つごうのよい ことですから まよいやすい が 良心りやうしん
 のいふこと は チト むつかしい です 大抵たいていの人は 二のあし を
 ふみます ので これを をもひきつて いたしますれば それはど
 めんしん な こと の ないのです 或あるどころよ 得平とくへいと いふ人
 が ござりまして この人は もと 或ある 大きな商家しやうかに 奉公ほうこうして
 りちぎ まつぼう よ はたらいて をりました が 主人しゆじんは その正ただ
 直ただあを かんしんして 相應さうおうのもとで を やり のれん を わけて
 別家べつかさして やりました が おやかたをの 得平とくへいは 主人しゆじんの
 恩おんを かんしん して いよく さまめに はたらき 得意とくいも おほ
 く ふやしました この 得平とくへいが 別家べつかして はどなく 一人ひとりの子 を
 まうけました その子の 宮参みやまゐりの とき しんるいともだち を
 よびまして いはひの 酒宴しゆゑんを いたしました が まだ 新世帯しんせたいの
 こと ですから 道具たぐばんたん そろいませぬ そこで 得平とくへいは 主しゆ

人の家へまゐりましてまことにすみませんがあさつては子供
 の宮まりで心やすい人たちをよびたいとおもひま
 す ついては御存じの通りかひしよあしの私ゆへ道具もなにも
 たらぬがちです から申かねますが皿鉢などすこしおかし
 下さりませんかと申ました主人のさにいりの得平の内とい
 わひごとですから早速承知いたしましたしてそれはなによりめ
 たいことじやサアくなにもゑんりよにおよばぬことじや
 入用ものはもつていねといふていろくのどうぐをか
 してやりましたがその日のいはひもすみましてせんわんな
 どのふきそふぢに水のあかへつけてあらいますやらゆを
 とをしてふきますやらさんじよから手傳にきてきたくと
 あどかたづけにいそがしくいたしそをりましたがここに
 もよくあることよ一人の女が重箱のかたかわをもつてふい

てゐましたところがナキつとおとして重箱の一方がはあれ
 ましたそのぢうばこは主人のなかくたいせつなぢうばこ
 です から得平はおどろきまたしかしモウしかたがござ
 りません飯粒でひつつけておくわけにまゐりませんぬしやへ
 やるにもそうさつそくとなをしてはもらへませんから
 得平もとうわくいたしました主人の大切の品をかしてもらふ
 てゐるくしてかへすなごとは得平の心としてまことま
 らくおもひましたからついにゐるくしたともなんともい
 ずあやまりもせずにかへすことをかんがへました一方か
 けてある重箱をさちつとよせてそつくり箱の中へおさめて
 おいていろくの外の道具は人にもたせてやりまして
 最後にそのぢうばこを得平がじしんにもつてゆきまして
 いろくかりもの、禮を申しました主人はにこくとさ

げんよく きのふの ちそうに なつた 禮やら よろこびやら 申て
 るました そのとき 得平の良心は『イヤ しゆじんの さげんのよい
 のいだに 重箱のこゝを いふてしまへ』と 申ます あくまは『イ
 ヤ〜 いふな いふな しらぬかは して るよ』と申ます 正直り
 ちぎな得平も 主人の心を はかりかね て ついに あくまの いふ
 どうりに したがひました そこで 主人にむかい 御大切の重箱ま
 で おかり ませしまして まことに ありがたう ぞんじます 人に
 もたせて もしも きづつけなご いたしましたら すみませぬ から
 私が もつて上りましたと申すと 主人は よろこび ソレハ
 念のいつたことじや まことに すまぬが ついでに 土藏へ なをし
 てくれと 申ました 得平は おつと さいはい すぐ 倉へ まるり
 まして いろ〜 道具のある おくの すつと おくの ちよいと
 出せぬところへ おきました 得平は 良心の いふことを さ

、ませなんだ から 良心は 得平をしかります とさ〜 得平は
 良心に しかられます その のち 何日 たちましても 得平の な
 か〜 重箱のこゝを めすれませぬ 良心が まいにち〜 くりか
 へして 得平を しかり ます から 得平は 見すれたくつても わ
 されることが できません 道で主人に あふて 『今日は よろしい
 お天気さま』といひます 主人の うつかりして ゆきすぎます と
 得平は もう 良心に しかられて しんばい です あしやくしても
 しらぬかは を して ござる ガ イマノが 知れたかしらん 恐い
 顔を去て ござつた おこつて ござるのじや と おもひ 又 後
 あふたどきに 主人は さげんよく 『オウ 得平どの よい 天気じ
 やノ ヨウ精が出るノウ』と いひます 得平は あんしん して ア
 ア またしれぬわいと よろこび 又 あふた どき 主人のかはい
 ろを みて サアもうしれた あか〜 にかいかはして ござつた

と しんぱいせず 内へかへつても イマ のが 知れたと みへる
 旦那さまは こわいかはして ござつた といつる きにかゝつて
 しんぱい せず この くるしみ は なみたいいてい での ござりま
 せん 最後に 良心は 得平よ 白状せよ と 申ました 得平は に
 ちくの つらさに たへかねて 主人に 白状いたしました 主人は
 これを さいて なんの 重箱の 二つや 三つ くだかれても お
 まへの ためなら おしいこと は ないと 申ました 得平は こ
 のことばを さいて じめめて あんしん いたしました 重箱のこ
 とは そののち きにかゝり ません この正直な 得平さへ とさに
 よりましては この ように 良心の いふ とうりに すること
 が むつかしがります けれども はじめ 良心の いふ とうりに
 いたしますれば まいにち まいにち つらい おもひ することは
 ないのです から たとひ つらくても むつかしく ても 良心の

いふとうりに したがはねば 悪人となり 神のおしかりを うけ
 るで ござりませう 良心は 神のさづけ たまひし心 ですから 良
 心の いふこと を さく は 即 神の をしへに したがふも お
 なじことです から むつかしいても 良心の いふこと に したが
 へば 神は おたすけ 下さるです

(學問の徳)

無學の者なまことの信仰をあすこと難し

學問といふこと は たゞ 文字 を しり よみかき さんよう
 だけ さら あんまり 利益の ありません いぬど いふ字 は
 そんなに かく ねこといふじ は とうしたるじ じや ぐらい
 を しつて もしを つゞけた 文章を よみまして その ぶんしや
 うの じけを しらなんだら かくもん の せんあいこと ます 又
 ぶんしやうもよみ じけを よく しりまして それを おこなは
 ねば やくよ たちません 丁度 のどかゆくとき 水をのんだら よ

いと いふ ことを しつて ある だけて のぞ かまかして
 水をのみませず のぞかなく のぞかなく といふ のぞ おまじこ
 とで これが 世よにいふ ろんでよみのろんでしらす といふ の
 で ござります よの中なかには 文字もじを しらいで も よい がくもん
 の いらぬ と いふ御方おんかたが たくさん ござります が がくもん
 は なせ いらませぬか がくもんは なせ せいでも よろしいか
 ぞ 申まうますと 私わたくしは 農夫いんくしやうじやから そんなに がくしや に なるに
 およびませぬ と いひますが あるはど ひやくしやう は がく
 しや に あることは いらませぬ かも しりませぬ が がくもん
 が なせ ひやくしやう に いらませぬか わたくしにの さつば
 り わかりませぬ 我われ日本帝國にほんていこくの 人民じんみんとなりました ものは 日本にほんの
 いろく の さそく や なにか を こゝろあて をらねば あ
 りませぬ にち にち の せいいくつ に 一つなつと 二つあつと

がくもん の いらぬ こと は ありませぬ ドウモ がくもん と
 いふと ぶにか がくもん屋や と いふもの が あつて その が
 くもん屋や ひどりの もちさりの よふに をもふ御方おんかたが あるかの
 ように おもひます が 學問がくもんは けつして そんなもの では あ
 りませぬ 人ひとのがくもん を 人が するので 人は みあ せねば
 ならぬ ことです たゞ その家いへの くらまひさ の つがふ に よ
 りまして させたい したい がくもん を ようせぬ人 は ござり
 ませうなれども わたしの ひやくしやう じや から わたしの あ
 きふとで あるから と わがで に ゑんりよ して ちとへ ひ
 く に およばぬ こと、 ぞんじ ます ひやくしやう ても 商人あきんど
 ても せひ 一人まへの がくもん の あけりや ありませぬ か
 ら 子をもちます ひとは せひとも どんなに ても して しこん
 で おかねば おやたる かひが ござりませぬ イヤ おやたる かひ

の ないだけ での あり ません おやたる つとめ を つくさぬ
 ので あります 小學校令に 人のおやたるものは その子に 尋
 常小學科の 科程を しこまねば ならぬ ことを いふて ござりま
 す 即ち 小學校の をしへ は 日本國民となる もの、とだ
 を つくる ために をしへるので けつまで がくしや に せよ、
 と いふ つもりで ありませぬ がくしや に して 月給とりにし
 たり しやつぶ を かひり はをりきて めがね を かけて ずて
 つき を もち まきたばこ を すい ひまな とき への あこ
 むき に あつて まんぶん を みたりに さみばく しよくん わが
 はい などいふて 働もくわも 手にとらず 丙が ひやくしやうで
 も 田へは ゆかぬ よふな あまくらもの を こしらへる ため
 に がくもんは せぬ がくかう は こしらへて ござりませぬ し
 かし せけん に そんな がくしや が 多くありますから それで

あんじ て がくこうへ ださぬ かも しりませぬ が むかしは
 ぞんなことで ありました か ぞんじませぬ が いまとき そんな
 なもの が ござりませぬ 又 そんなもの、でさるのは けつし
 て がくもん が 見るい ので ありませぬ おやの しつけが
 わるいか と ぞんじます 貧家じや から がくもんが いらぬ
 と いふはづ が ござりますまい びんぼうなら びんぼう はず
 いやく ことを しこんで 一人まへの おしへ を してお
 さませんければ いつも つまらぬか と ぞんじ ます 舊幕時代に
 は 人民が がくもんして あんまり かしこく なつて は こまる
 から 武士か ものもち の はか の じぶんの あまへ さへ
 かけたら よい ひやくしやう の 一心に 土を いぢつて むよ
 と いふ風で かいまやう の あるものは かつて に がくもん
 せよ わがかね で けいこ せよ、と いふ、ふう で 個人主義で

ありました 只今のむらがむらの人をかしへるのせ それ
 そうをうに たかに 應じて か、りものを だし 子ども ある
 いへも 子ども ない いへも おあじよふ にか、りものを か
 けて 二村の子供を しこみます そうです から なんじうで
 月謝金 じゆげふりやうを だすこと せきぬもの のねがい
 よつて ゆるして やる と いふ きそく まで こしらへて し
 こまうと してござるのに とやかく と いやがるのは ちと ま
 ちがうて のござりませぬ か これは こともの しこみかた に
 ついて 申ました こと ですが 大人でも がくもん は つとめね
 ば ありません わたくしが あるせんせい に なせ 本を見ぬか
 と いはれました とさ ひまが ござりません と 申ましたら
 先生は 暇が？ ひまが？ ひまが ないといへば そんなものです
 けれども ねるひまも たばこのむ ひまも ありましよう と い

れまして まこと に のぢいり ました ことが ござりました
 あるはど かんがへて みます と ひまが ない と申すは い
 やじや と いふ かはりに いふ ことば で つまり あまけの
 いひぐさ です 神の道を おさめ 神を しんじる ものは がくも
 ん して 神の どうときわけ 神のしんすべきとけ を しるよりに
 いたしませんと 一心に しんじんしても まちがふた 信心 即ち
 妄信と いふことに あります 観音さんや とか 地藏さんや とか
 虚空藏さんや とか 毘沙門さんや とか いろく と しんじん
 えてゐる人 が せけんにも 多く あります が 観音さん は な
 に 毘沙門さん は なに かと たづねまゐたら 大抵は しりませ
 ぬ です ソシテ どの大師は めに ようさいて 下さる とか
 どの 観音さま は 齒いた を あをして 下さる とか いふて
 たゞ なにかあしに 人の いふこと を さいて 齒醫者か 目醫者

のよふまゝ 人氣で ありがたい ありがたい といふて めます
 が 丁度御せんだてして ある からのせん に むかひ はしめと
 らず たべもせず うまいうまい ナカク よい加減じや といふ
 も おあじ こと です これが 妄信まうしんです 妄信まうしんの しんじんで
 ありません そうです から さのふ まて は いなりさん をし
 んじん して 今日けふは めふ 妙見みょうけんさん あしたは 不動ふどうさん とい
 ふ ように かはります 人氣にんきのよい はうへ つき ます これと
 いふも ありがたい といふ わけが わからぬ からです ねが
 はくは 御互ごたがひに がくもん を つとめて 我われ どうとき 神の いや
 どうとき を しりたい もので ござります 妄信まうしん者じやと なりとも
 ない もので ござります

敬神 說教道の話後篇下之卷 終

明治廿六年九月廿三日印刷
 明治廿六年九月廿七日發行

定價拾五錢

著者

平安教會理事 堀邊昌雄君
 奈良縣大和添上郡帶解

發行者

全 山邊郡三嶋天理教會所御門前
 今村熊太郎

全

印刷者

大阪市西區阿波堀通二丁目六番邸
 山口恒七

大賣捌

大阪心齋橋筋順慶町

全

矢島誠進堂

全

名倉昭文館

賣一 大和奈良
 所一 全郡山

阪田書店 全
 小島文明堂 全
 森川米三郎 全

豐住書店 全
 宮澤書店 全
 平井茂 全
 後藤書店 全
 井久保定吉 全
 和久保 全

小川源

治郎著

横笛獨習之友

全一册

堅六寸横三寸厚六分
美麗折本

正價 金一拾錢

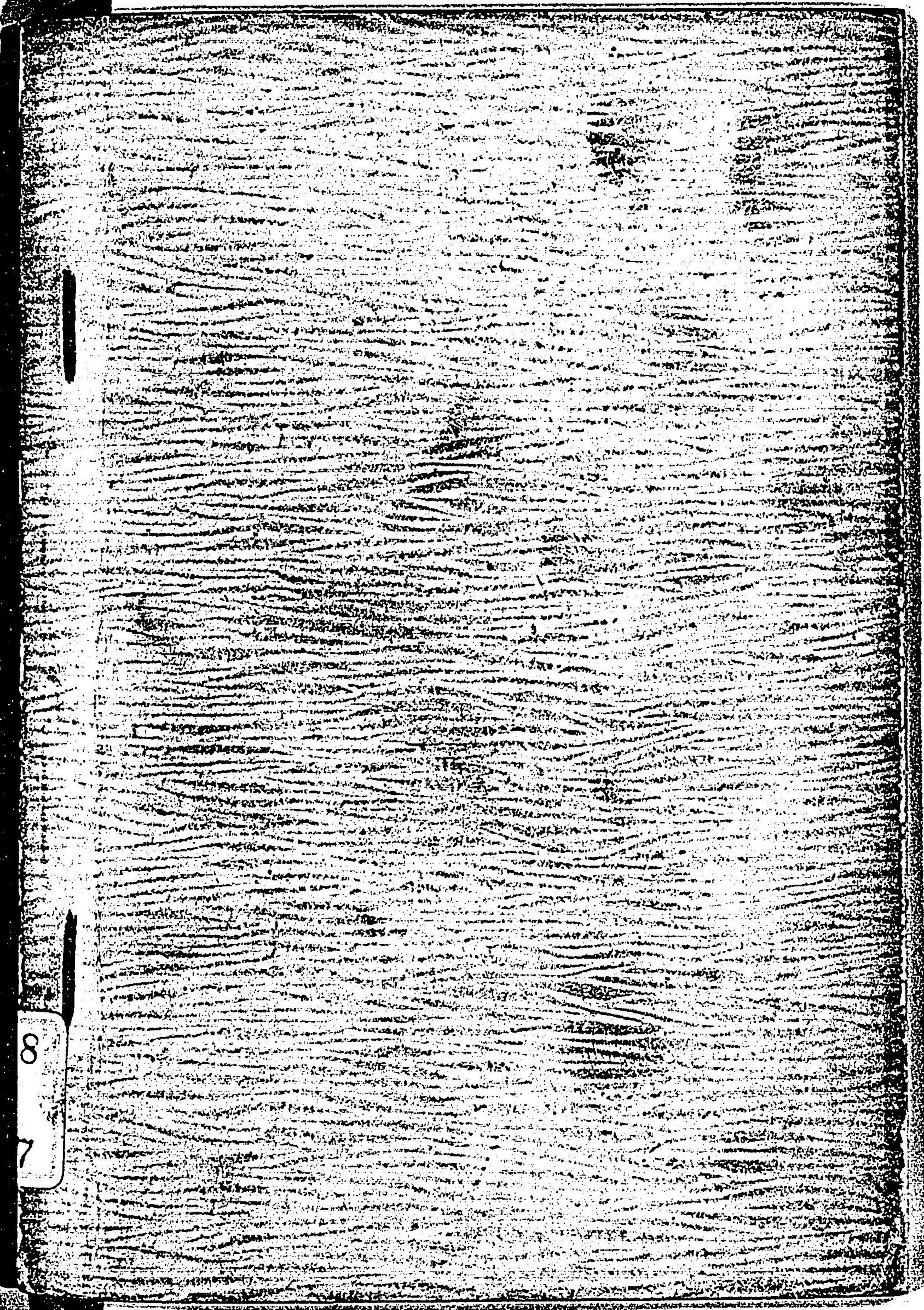
郵稅四錢

新羅三郎義光は足柄山頭、月影清く萬籟寂々たる處に笛を奏して幽壑の潜蛟を泣かしめ無
 官の大夫敦盛は須磨の嵐に青葉の笛を弄して彼の武骨ある熊谷蓮生坊に鎧の袖を濕はさし
 め藤原保昌は河へ渡る笛の音に強賊の膽を挫しさけり英雄開日月ありとの之を曰ふからん
 時こそ變れ十九世紀の今日に生れ優勝劣敗の活世界に立つ者も亦必ず身体を休め精神を養
 ふの清樂を求めざるべからず是れ現時横笛の盛んに行ける、所以なり此道に堪能なる小川
 源治郎氏茲に見る所ありて嚮に篠笛獨稽古を著し今又此の著あり流儀吹方を初めとし記
 號調子神樂能樂舞樂唐樂踊りシヤンギリ等其の目次總て四十四項より許し物段物等細大
 漏すことある何れも譜を設け符號を記し初心の者にも忽ち了解し得らる、標平易懇切に解
 説を加へたるなど決して世間流布の書と同一視すべからざる非ず左れば繁劇なる事務に惱を痛
 め玉ふ官吏機敏なる商業に心を勞し玉へる商人或は精密なる學理に神心を費し玉ふ學生諸
 君等は速かに一本を購ひ神倦み氣疲る、時は之を緋て吹奏を試み塵界の煩冗を忘れ給へ

發賣所

大和國添上郡帶解
 大坂市東區心齋橋
 順慶町北入東側
 書林

矢島誠進堂書店
 木原保吉書店



8

7